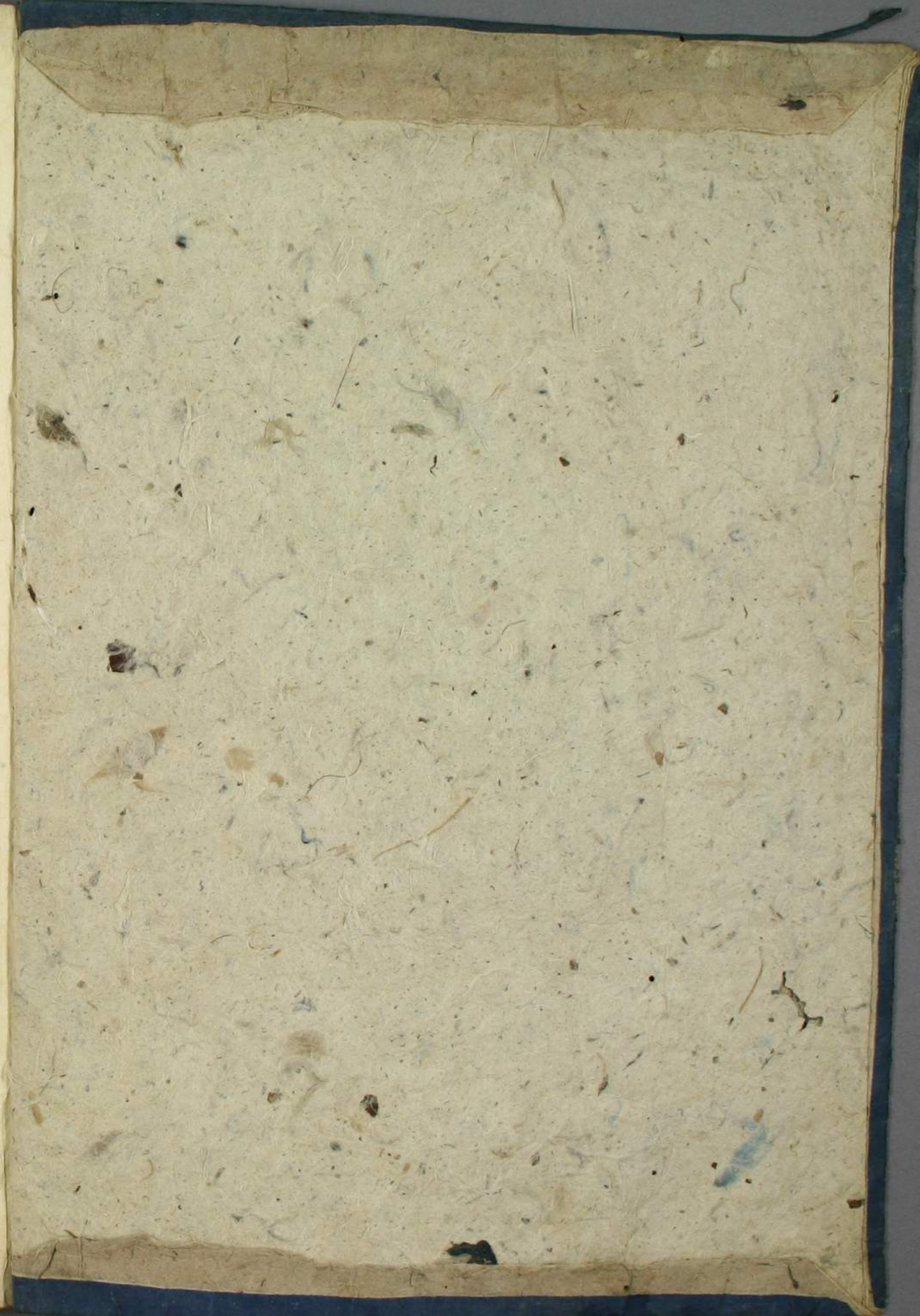


時面并木曾記

ル 4  
4812



一  
く  
羊  
本  
曾  
記



1813

1813

Handwritten text in Chinese characters, oriented vertically.

4812

竹裏語文庫

Faint handwritten text in a cursive script, likely a form of Japanese calligraphy (sōsho), covering the left page of the notebook.

一ノ巻記

文ろ大いにかきつゝれ十とせ余りよ  
年あつたれをたけふむとすあり  
きりさうふ水あもすみ所を  
いとあふん甚は日本と後見政こ  
しや事ふの清和のみとれ清か  
新田義重れぬの末堂平源家  
麻郷の太常 秀忠郷をきり  
父れは日本とさく久いあ  
征夷將軍の年あひつたふく  
しうききて 秀忠郷 かきりて

この巻と一のきりつゝ  
うみふみつた  
の巻と一之けぬさの巻のさ  
いひはんとと大あり日本れ  
あつて殿法なりつて  
してすみきすくはうのけ  
とこのじんこちあぬさ家  
あはれさ利きねし  
わがもまかきくつてあむい  
きありのしる所ハみの山れ

遠かぬわがよて八十年一余り  
すみあき侍まて余故もゆく  
あふきこと人なりあふきさひま  
うしとてととて日毎(ま)いよあ  
次六十年あたり此いふと十とせ  
又とて世さるあむととむるも  
袖のあみきとれあつきすはか  
うしころは三冬をうけし先  
しとてそのふこりまを先  
ふかぬり

変じて殊もさうしお葉を  
とらち帰りつて又うらる(ま)  
恋しくはりあうり来てみらひの  
暫めらるあきたむか  
とらちかくさむるたうたとの葉を  
書つた人も私あつたあきり  
あむしとあきと旅のそのすま  
なう所くも私すま(ま)となひ  
侍らめりうねす急と云むる屋  
川舟うらあ勢田はみやけてと定

つまじし書つらきしゆり南宮は湯社  
うねをすひこのみよとよめ恵いと  
かう

つまじしこのむみの小山は一本雲  
おまことあつたれく恵あまきて  
申のなきらり計よ鷹江くつきあ  
きききききききききききききき  
送りしよい月はさ一のゆるかよ  
舟又のぬみかかんころりて余波  
とむねもたもよるあるし

養をれ滝うこのがとみ毎と舟よ  
りみやさききらあねと山六月  
おがらうくとんえん

むまひもをてさ梅さ  
月氷の西と移り細波一るくよ  
すの川つととさくあくあ入埃  
北川舟うも那波おをらり通ひ  
とねりい出る

さいしり八雲もさあつ埃埃川の

よまむともかくも年頃舟を  
篠めをうくあつく成りし作せ尾  
張の海つゝん和をさるるこゆくを  
の恋しさハしもかたをさりを利  
とりにかきともあゝ世の圓  
一かや波のーろくをん  
己の割とろよ藝田よつき侍り  
ろくをさきまを月つきふてぬいと  
才がしきつあましとーこまの  
あすを云とまー人私くやと

御みぬまよひあつてとら  
このかとの又目よの書あり  
とくハうさ寺とかん云

まてらる人ハ強かつて  
雨のあつ日と又あつき日と  
ときとあま笑ひひり又右然のキ  
屋一ろありやあるさけ又強りか  
一かう強さそまのーまらふむあ  
すまねりとみあつハあがーあ  
才照沙神は所は移らせをすむ



ぬさめ玉の守とて一先下りて  
てとまきそはとぬり去もあはれ  
目眩くくくかとかとかく産とに  
ありてとくくく羊のみも侍り  
ぬとこきよきよれきとや一  
出まは秋子あやとくくくあは  
くくく鳴海の若り屋とて曉アカツキ  
いやくたきとてとくく侍が  
みくのは所ハいあ天文未やし川  
氏義えのわく後河の國よりあ

ととととあみくく三れとて  
く尾張の國才て志とあて無あり  
をく列具くは所とくくひ母の尾張  
の國守織田上総守平信長はゆとい  
とみきくくくく川氏むまに軍  
をうまて余とりあやとて  
無ともいくたくたりぬきと  
父母あかんくまはくくかかかん  
けしとときいぬのおんあこころ  
事はのとうあさと事あさあ

とあるは、ある

いふもともあるは、武士は  
のいろいろの世と、  
池野、  
す、  
さ、  
あり、  
極、  
せ、

二村山とて、  
大、  
才、  
あ、  
目、  
ま、  
一、  
ひ、

いさつきききした後のくさーさと  
和もささくちうーきさる浪名はちうー  
うこの布と母式ととさくさくハ橋も  
那ーさきもまさくーハちうさ頭り  
とこさくめ

きくおささる浪ふれちうハ橋とさ  
ターかのさうさじ通いぬさ  
あさるよりふさし舟りのりあさるり  
めのささるも男のささるもあさるさ  
ふさくすううささるささる貝接ふと

んさ

すうあさあさいあさいと友よせん

いさよふいあさけ舟とおもり

前坂つきぬ浪さるる所ハ

いさよふいあさけ舟とおもり

ささる人あさけけささるりささ

いねとまねくくさ

かりさ先のをさうささるささ

種とひくさ農人の情り

とういさか夫竜川のささるりて

和子とるあやうと竜純<sup>リゲ</sup>をふつ  
くふとわりえつまうと暫くるととめつ  
心つまはる後のまゆのふきひあん  
きんまのふつまれ里とまきんぬ  
どし藤のうそわらうあーきと四條  
の子のまもわらひ出侍り桂川の石  
と佛よなるあぬとわらわくぬのあ  
才をわり

とら出でさおすや賤のよつらと  
きんまのわとまもくけ川の里

およひの西<sup>ウカ</sup>坂よるをらぬさ夜れ中山  
の榊あまこまのなもまむき  
あまけ所の物集とあふ殿の餅  
権とまきまあまきありぬ妻叔  
首陽のむしやとわらひ出でるの  
ちしれと書つく

け里とまみあまのたのつらぬ  
まよまのあまのあまやま  
朝をちてさ夜の中山越過く月分  
を残りてのまらうら

旅人此岸のきくよ夢を見て

舟の趣由くさ夜の中山

林藤のまじり川の里ありまうむじ

東よりけりふけ岩をなるとり

きまこと家名あまじりく水とあ

門とつねぬ出入社と一まうりま

とちるま頃をなるとりか絶てあま

あまの白ひいつまじり川の

あまことあせり里のい

大井川をえらり川原のーりく

えれをささきて海の西をえらりむく

あまのふまのいくあともかくわ

布と引をえりん屋あり旅人此

木つねりくわひあめりもあを

りあしうつのおつを相とりま

うねれとまじりあめりあま

かららりま利がいと月がま

まことまのいのもねり決まりこと

云宿り体ふかると伏人の坂をえ

来てつづきをらあまをま

ら能くして是もあつた接人の  
きつたやまらに建そのの岩と  
爰の和をりて紫屋とあつた  
宗長法師とあつた能く  
人すむし所ありと云りあつた  
りてみる山の山まいたとす  
てどしあつた所あり本を  
あつた清くいりてあつた  
すもさす其人もあつた  
小き紫の菴とともあり

甚あつた古残りぬる紫の菴の  
すもすあつた水たつた水  
すもす府ハとれ將軍考志郷地  
父君もみをとすひあつた家  
た西をいりつた都といく  
まりしとす人もあつた夜一  
酒のみあつた日をもとす  
きつた子の講と云所ハかす  
らねれを大將頼朝郷日本と心  
才、よすつたこちをいひて

平三景時とまのひよみ時めさしあ  
オリ又木ころとまきとあわさる人  
ねと人ぬくしてお朝都世とま  
をさしひい後かおらねとをさし  
おさま系流をまに上りし人  
まころひ逃くらよけまかおま  
ら出命け所よりあ一まおま  
く命とと光一とあり悪人かま  
とみきとら世とくひくまのりま  
うしも一つおりまらかあまとく

んまのいおーめとあさほして悪人  
用らるハおらつたはまき事  
あし侍の人のまら<sup>ま</sup>邊<sup>ま</sup>路ハ命な  
かく顔子の命らんくま  
りま<sup>ま</sup>とま<sup>ま</sup>しあ<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>  
さかろうとまハ又侍の人うまのま  
のくの中ま世のらら<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ら<sup>ま</sup>ねま  
れま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>と引もてま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>有ま  
わ<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>く<sup>ま</sup>のあ<sup>ま</sup>あ<sup>ま</sup>一<sup>ま</sup>あ<sup>ま</sup>ま  
りま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>のま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>て<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>い<sup>ま</sup>

り女清の人の園の春のそよらねが  
うりまはしきまきてみる宵の山とハ  
こぶら〜海にゆくいあなをそ流と  
として〜所あるまきうねよあハ  
條のまきと海の中よりまきを  
うらまは後人のまきとねあハ  
なりまきとあハ所れまきハまき  
あハまきと〜まきハまきハまき  
れあハまきハまきハまきハまき  
まきハまきハまきハまきハまき

波よりうけける三條はまきハ  
とめぬもまきハまきハまきハ  
あハまきハまきハまきハまき  
れあハまきハまきハまきハまき  
てまきハまきハまきハまきハ  
りまきハまきハまきハまきハ  
まきハまきハまきハまきハまき  
まきハまきハまきハまきハまき  
まきハまきハまきハまきハまき  
まきハまきハまきハまきハまき  
まきハまきハまきハまきハまき



すてしるくともみれをさへまして岐  
のうろくをせくも伊せ尾張の  
海つ解く八木と物う瀕をりみ  
まを塩倉まきありかああひつ  
月砂地よりくもありのうらもあ  
りさるくくうけあう世れわ  
よ云まももさふじまきう

物々々々々々々々々々々々々々々々

高き山にけり物々々々々々々々々々

まをさし中しく目とれよしてさあ  
友川和をさる岩剛とりやを舟を  
物さいとあやういよまもつあす  
くまうあんまいうてうれとん  
程子供をうううてうれせら八  
うやまひのいよまもつあ有まん  
うまい語の原さ眺るいあうより  
云あふせはと使いそてありう年  
本はまううまうとみらうつま判  
う(おまいてうまうう年をとあうん

みちもさうしてつくまつ  
る。其をさる。乃に法を創。らよま  
て。此は神神。伊予。播磨。出づる。さ  
ら。う。め。ま。よ。山。積。の。人。ま。さ。り。伊  
予。う。め。い。さ。り。筑。ま。る。う。と。と。め。て。か  
書。せ。播。磨。國。と。て。い。う。う。ま。め。か。り。  
り。和。え。の。利。益。と。あ。け。所。に。め。り。  
能。固。う。あ。ら。う。水。の。幸。と。物。更。  
き。よ。い。い。あ。も。の。判。と。と。い。ま。け。氏  
と。と。ら。う。め。ま。よ。め。ら。み。あ。り。う。ま。

ぬ。う。つ。ま。て。は。ま。く。家。ら。り。の。山。海。の。海。う  
ゆ。も。と。山。中。の。ま。ま。り。け。所。に。さ。り。  
天。正。乃。未。つ。う。き。と。山。系。氏。直。と。め。あ  
つ。は。八。の。國。と。六。計。と。伊。豆。の。出。り。て  
一。の。さ。り。め。の。山。田。系。と。云。所。に。一。と。く。あ  
り。を。集。さ。う。く。わ。き。ら。其。先。ハ。時。政。が  
と。う。未。よ。も。あ。り。宗。雲。と。う。云。て。京  
に。あ。り。の。の。判。の。す。ま。獨。あ。を。り。  
は。ら。う。其。國。に。た。ま。ま。て。七。川。氏。に  
又。あ。り。う。か。い。ま。い。の。う。め。い。

しんせうしめらんほき國とてしんせうが  
と物くさうみの國と梅りう乃子氏之康と  
之父もれと梅り心さうしんせう武藏  
上野あまのいさうとよて心のもり  
て氏直はめ川てつをて小田原の  
里又すみきりう乃出るれ國白  
豊后流考吉郷け由りわりがう  
上め一をさうハさう舞式ハ上はす  
といはてはさともわう勢かよねうて  
用さうりらまことしき取うをんそ

多乃共と引具てて責くをう  
すく小糸のさけ山中又城とて  
岡氏た為ちまといりのと善也又  
あけ山の城とてて叔父た英  
濃守といふものを入直をり屋  
みう日北かととあをま多れ共をぬ  
きつ又分あけ山ハ尾張の門太信  
信雄郷むつとる其身ハ山中よむ  
中細言秀次郷と先めして時のう  
ち又責をさうりぬ秀をまらすはも

一柳任彦守を命と、とらむるのめり目  
危うく小田原城より寄らるる小田原の  
もとてささきいありと、おん考をいせむ  
とらむるに暫たりし軍れ兵は、  
小田原の東さ川の海も、はらう西ハ  
早川のしりぞきて、二を三をよ巻  
くをみたりと、いありの同し、みか月の  
末つと、小田原をいせむと、こい  
しる所の國をすて、考をいせむ  
ふりし命と、つと、いせむと、こいぬ

まこと、つらして、小田原のしる所と、ハ  
みか、ま、平、家、原、郷、方、しる所と、ハ、小  
田、原、の、東、さ、川、の、海、も、は、ら、う、西、ハ  
早、川、の、し、り、ぞ、き、て、二、を、三、を、よ、巻  
く、を、み、た、り、と、い、あ、り、の、同、し、み、か、月、の  
末、つ、と、小、田、原、を、い、せ、む、と、こ、い  
し、る、所、の、國、を、す、て、考、を、い、せ、む、は、  
ふ、り、し、命、と、つ、と、い、せ、む、と、こ、い、ぬ

いせむと、つと、いせむと、こいぬ

甚夜に小田原のすくも居る海軍の  
おとすか隊をへたしおとすか隊  
山崎一守をへたすか隊をへたすか  
すくも隊をへたすか

あけ後の隊も所あるも隊をへた  
と隊をへたすか隊をへたすか  
いふもすくも隊をへたすか  
と隊をへたすか隊をへたすか  
へたすか隊をへたすか隊をへたすか  
へたすか隊をへたすか隊をへたすか

小隊の宿し旅人危すおひめて  
こまおんとおのをもへたすか  
と隊をへたすか

この計りすくも隊をへたすか  
いふも隊をへたすか  
むにうのあつりむむ橋ありむむ  
うかすか隊の右大将けむの仇養  
よせをへたすか隊をへたすか  
て病つすくも隊をへたすか  
むむいふも隊をへたすか

やるのぬききしりのあかしくぬくハ八搭町  
 よきよぬぬかたおらうと云ハ見すゆ  
 くらぬきよる大佛ハこれ倍あまハ  
 鳥とよめつとよきとあつみの必  
 定是上人とくかのもちくはとも  
 のとよすし光をとりさハ夫のみきよの  
 像とて堂舎をたらし風のたつ  
 とえんまき玉の尊危とくをうし  
 うめしうりいつの比うやくこやま  
 ことくハ佛とくうあむおらむり

びうしゆらふハ崩して狩  
 いとらと屋の文よしとせらもたも  
 ひおらるとせとくハ親者とあ  
 めてよこ一ありきよ所よつを  
 くらた堂ありひきこのをつすたる  
 くといん和をさるる南ハ海岸に  
 くといんわくハのけよよら徒も  
 六と海よハあかぬるあつさる  
 のハ備ハとるうんハのけとのも  
 みそきてり本立物たまきのちも

神名とて人地のまうとも由あるさ  
たよまる細伎の考しはうおりのを將  
のすみ所ハこの御座しあよまひの  
をさやと成るまを顯ゆすはて  
こよひぬと東鑑し書しもが  
あん廻欄りしをしはひみぬ  
をくぬの来りて古事記とてよ  
まよ面へはもうぬ心ちうする  
あしをまをひりてうひ事  
うぬとぬし人の世の中

予のじうようも長一の神意  
ちとせうともぬてやのき恵と  
加茂乃名明の宮よりをりて葉  
も本もあひなり穰乃霜さえて  
とをぬおひひもて  
あひまぬ本をつあよぬ  
うのあよぬこぬ長た  
えぬ乃乃神しぬ  
あて世よ乃乃神ぬらひぬ  
こけのまよぬぬぬ

こぬらり坂成て建ちる常光寺  
ちとらんよとけかうのまき計之跡  
らぬとらん一所くのみあるさ  
才おしころりてみらるあつねく光  
ゆゑ二階堂とてえんすゆゑと  
急ぬ積もつたありぬ金澤日云  
所ハあつたよるあるのみあるは  
日本よきいふあきころりたりよ  
えてやいさしとてあつた所ハ  
むくまよとて同よきつ所ハ

左右ハ山うひえて岩まうの通ハ  
わつたつてきつあまを清きて  
あつた水がうくきつてあつた梅ち  
りみちしつたあつた錦成  
さいおせるとも清くあつた  
目と才あ心ちするまうあつた  
あつた海方藤より入るさつた  
の真砂ちとらと山法すまを  
めつたが海方三四又六はくよま



り候しきよきて横と進あひく  
とせよふとせよあんおもと怒り  
よあらん海舟は以月又本番を  
ちおんれらるる候うあるも心かろきか  
利山の之より後よりをもわすしる  
らあり西湖の六橋とも云ふきよ  
かろしのかよ駒ととも先哲なり  
告て

大とつんげ里人乃朝ゆふ  
あつめなほしてもかくやあつじ

人をも乃和の男よかへハ葦電一  
ととあつて安を世よせん  
海山乃つこハあまくと安め  
そとよふよとといそつハん  
もあつてしりてもんをい浦の  
もつたよ何する所ありやと  
わ金の安つこハ遠又ある海  
と成さけし赤の山りと又堂尾えん  
らありあるとそつあり候うと  
みとらたて神さひをらち増と

お母さんあんなにやさしいお母さん  
あんなにやさしくして下さるお母さん  
祇園寺として御後乃刺使實時と  
てお糸の二つがけしつらんさうさう  
「あんなにやさしく切く切つなせらぬさう  
片をとめておいて、かろふ又大和の文  
あんなに集れはしつたりくのみ  
うまゝ又さらさらお母さんともうさう  
の姉さんこのお母さんお母さんお母さん  
ありとくお母さんお母さんお母さん

えーお母さんあんなにやさしいお母さん  
あんなにやさしくして下さるお母さん  
あんなに集れはしつたりくのみ  
うまゝ又さらさらお母さんともうさう  
の姉さんこのお母さんお母さんお母さん  
ありとくお母さんお母さんお母さん  
あんなに集れはしつたりくのみ  
うまゝ又さらさらお母さんともうさう  
の姉さんこのお母さんお母さんお母さん  
ありとくお母さんお母さんお母さん

喜葉れりみちとせん云々のこと  
はうきく後又うへおくとがらん  
先ずもちて黄葉（たが）を引きて  
喜葉ありしうさう増らん  
帰るこのそなうう山崎をすあ  
よらの海とて雲の一本ありてき  
ありとさういふ事ありきなん  
うらねとさういふ事ありきなん  
さういふ事ありきなん  
みよとてさういふ事ありきなん

菊とすてむかぬ帰りの娘とす

所と云

又又書と菊の娘とす  
かあててつるから帰らん  
およひの事とする事ありき  
しる事とする事ありき  
く成と目西の山とする事ありき  
うきとめとする事ありき  
うきとめとする事ありき  
うきとめとする事ありき

ありつと先て出さす

けちとの張のたのみとつそ

書つる川此水くまのあ

品川のもじをよいきをこ

りおるんちうまうりむ

せ張のおがつつおき侍えつる

こひあとうんく云又馬とい

作さのみあがり

元々の

とて

とて

とて

とて

本曾記

元和のふり承のそこのむ大樹の作  
おとありのふ本曾山乃又や本引下  
とゆふりふんとはしる所ハ人の  
ふふまこと及ふよこのみんをわし  
としてふん甚こらむむ所ハむさしの  
國江戸の里カヲ利キりりおふ  
物もいものあところむまことやる里の  
金版↑ゆらひおふひありぬり  
すぬらさきをいしとらんハ六月か  
まぬをいハん甲斐とやあは

坂國へおしより侍り其方へいさ  
 の物へ書つくつを物々まことわさ  
 のみにてやりすさんをものむかじ  
 又月下の夕日盡つてうと首<sup>カド</sup>達<sup>チ</sup>する  
 むささしやからさるもの云むいめ  
 高きうさうともさへいと帰りん  
 といはさるへうささくむささし  
 府よりいさなり侍り及六里廿六日ら  
 少きめもした日やあせぬおくはな  
 帰る人あせした文書にて行くもあ

里めうへ王をとりやうさあ哲馬  
 水うりんともあわあへの家又た  
 りお侍りいあへ天正のころけ國の  
 みきともしへ家うあ人多くうせ  
 めはるをとあひとさうあまういも  
 あはそあるもりもくこと月  
 うたりあぬるさしーあはく  
 おきくのうれらへあかあまこ  
 あああつひもうねらうことあ  
 こがはのあうぬりしてのほら歩

人のあつらひけりも極ふりある  
一きおとれりひしうがとくらふこの  
小佛の板とうきとあき笑ひてあ  
せぬらひきりたふと云里うとが  
り侍り怨の念れいぬせさいもん  
きやう一強の座いと侍り思  
合廿七日法とめて出回くふひる曇  
りしる雲あを晴やしてホリたを  
きいせりの音と云里とくらふ  
ふとらん妻はうと里人

花の名はあつ所とれり  
さぶらむと云いとあやしあつ  
む人すつとね和ををいひ  
名つきとて双のきうハ屏ゆを  
をそしなとをん尾られ岩さ  
ひきうとて又又計もやあ  
一をハこく一水うこひも  
ああぬらもま一和を  
めきんもたかつら一むおさ  
云山里又屋らりぬら

くみゆものとりあはさるるに侍り  
九里廿八日卯のよりの白雲りーをある  
婦人よりいりたる事と云ふらちよ  
さうきとぬきもすー山崎の  
よきをせぬ條のみひもーを本  
かきとらのゆきもあも供人  
えんたいと心かけし雲のよき入  
ぬきとらとらーかとり  
ちきもよきをあき居ぬ女  
よきとらとらー山崎のくみゆ

人とりけきをまのよき  
西雲うら山崎の  
かきとらとらー山崎の  
少よあわー山崎の  
きかんー山崎の  
きかん  
山崎の  
山崎の  
山崎の  
山崎の



奥とらりしと云ふ一つみとすく  
りんとあ川せの石と砂書て一つ  
り一かふ事と云りて、はまめありと  
あむ法の師をうんがと、くも書て  
一つむと云里人のうまら侍り

妙ありし法のもの葉書をま  
川せの石なりくみと  
さつたりの美ハ道の傍なまを  
寄りてみるくあま果とるる  
とまをきのみとあつるを

け所よれりしにおもつくと  
あま、くまぬとのそよひ  
か一のれまねとあつる  
かとれぬひ出らる禪光寺ハ信濃  
西よりしめけ國守武田氏晴信は  
一秘し其後又信濃へりたり  
きよしむぬまこと雲ハあを  
け玉のく、あつる月うて侍り  
夜ハ月終れ雨とあまて  
しく夢又の心もあま

とくしつりつり

暫きく様ひ乃たなよ吹きて

少り里んせよと夢又ぬ山風 十

廿九日勤のしめとぬ雨ハ晴ぬと

ふとふりありぬ雲ハむく引

れり

さやふもんをとろくもく

ふぬくく西ちり花雲

晝つうきーく才菜うもてあ

一の家又きち寡侍りけちうい

かきよいろく城まーあよの

残まるとありあーよの出てと

武田晴信のち郎勝おけ玉とつと

知りし時府中をけ所又移りて

新府中とちつをさみきすひ

いすよとあつくく大とあさる

織田信長卿 大郎 信忠 教範

の共とーきとくきこうひ来き

一信濃きううの城信忠れ

屋うききみかのみ大郎 命と

きよひの播磨の若きしころに  
ていしちりくしあうせめきを播磨の  
うねちりくしあうせめきを播磨の  
計りし郡内とさして播磨の  
すひし郡内にあつる武田年比は  
すいふ尚徳年といふものなりて郡  
のうちに入るるをて天目山の事  
ありしを信長のとくけ滝川左衛  
右衛門忠實の旗本といふ播磨同く  
る言部信義命といふもあは武田は寝

風二十八代ありしころに之れ晴信  
のぬ軍のさききよくあつてこ  
さえありて甲斐國に信濃へつけ  
まるとあつて合してつるをいひ教  
ても志とやういふなりて天正の  
しりしひしあつるをいひひぬ  
を言部忠實もいふもあつるも  
家のいふことありしをいひおら  
んとあつていふもいひ侍りし  
ありてかくあつたりしころに

予はましのしをなせんとて一カ所を  
こつたれり。あししとてうきなるまあを  
ましも信らましものきといふ祭と云り  
う節りのぬ七里廿日明和をさるがま  
ゆりふ川のながきいりまのいには  
ありかといせをくといとぬ一里  
人と同じこまぬ人しをま川とて  
照つくりぬとす月夜を云廣川の  
きりり又式とたはつぬ  
入る年とていおみまは川の

又  
よまのしをなせんとて一カ所を

水の中をたひりてわが川  
湯てのみうあつたま  
ま柳の屋をまぬま月夜  
くひりりぬ  
ま柳のいよか様とて  
交うましくよかた  
飯沼の創りいそことあま  
と遠うまをまの侍りし

あまてらすの事を計りたまるとん  
えあうらたふたもまぢと海右神  
さいきまのさすいひさおぬり社の  
かとりみめらうまをまらる法師を  
のすのこま念珠でわすりちうく  
君家一てうのふのこまおととひり  
きらうまあままありうままきい  
とま言(侍りけ侍神いさあみのえ  
おとくつちとあまきりーたまま  
としてんふりしよえつたまま切ま

ぬ一つをハ一まの侍神ひとつをハ  
んとら一つここの侍りみあり所の  
あまきかとうまらふまの西のま  
りみお月か照日も絶すま侍  
おあり根入の根と母持まハまの  
おて根ま入ぬまこと又まかま  
あまありしうま比のまのあま  
ひま焼くまぬあままままら  
一ま計の本ありこままらかま  
うまままらせまらうまらまら

ありてはのうらうらとさるるをよめを  
ちりしるるをよめをよめをよめをよめを  
のうらうらとさるるをよめをよめをよめを  
和子とよめをよめをよめをよめをよめを  
さうらとさるるをよめをよめをよめをよめを  
をよめをよめをよめをよめをよめをよめを  
りありく中すすすすすすすすすすすすすす  
産所もありてはのうらうらとさるるをよめを  
—も多うらうらとさるるをよめをよめをよめを  
—く余故ありとクアはりハ下乃

すむすてとてやめをよめをよめをよめを  
り十里 朔日雨いそくあまこと出か  
いめをよめをよめをよめをよめをよめを  
とりのつとくわめひやうあう—  
—く様のをののののののののののののの  
いむいむいむいむいむいむいむいむいむ  
二日晴ていめをよめをよめをよめをよめを  
せとととととととととととととととととと  
をよめをよめをよめをよめをよめをよめを  
とりのつとくわめひやうあう—

みあまのうらさきーんささるたと  
さきさきさきさきさきさきさきさき  
しとえつらねーんささるたと  
物がつむむもやのふねのささるたと  
わりのささるたとささるたと  
ねえのささるたとささるたと  
てみるささるたとささるたと  
海り同じささるたとささるたと  
のささるたとささるたと  
れささるたとささるたと

あまのうらさきーんささるたと  
くささるたとささるたと  
山川のささるたとささるたと  
ささるたとささるたと  
ささるたとささるたと  
あまのうらさきーんささるたと  
寸ささるたとささるたと  
くささるたとささるたと  
あまのうらさきーんささるたと





さよおとくはなりのあけのついで  
人のうちをあらしてはるかにいづれ  
あはれあはれとよまにきかぬ  
かたき一法の師ふといはれし  
くあらう謀のさしをせし  
みれねくはらあはれを  
よまにあらうとてあはれ  
あはれとてあはれとて  
あはれとてあはれとて  
あはれとてあはれとて  
あはれとてあはれとて

とて里はけうすもれり  
ききし其夜はうこめをりて  
しきおの所のこもをり侍り  
まをりしあはれをり侍り  
あはれとてあはれとて  
あはれとてあはれとて  
あはれとてあはれとて  
あはれとてあはれとて  
あはれとてあはれとて  
あはれとてあはれとて  
あはれとてあはれとて

すくよふきまにわのあし入ぬと  
すきともうらひあつ申つ川は  
すくよあましりともうらまふ人あ  
まてま算てはひひああうし  
おまうらあうし儲かどしきりけあ  
きりかいきと云うこよハ遠く年の  
ししうみもりしきりぬあまし  
まうねしししきりしきりぬあま  
ハ文書てつくて夜ハおのよと  
すりぬ

初りしきりしきりしきりしきり  
用しおのれしきりしきりしきり  
六日みともしきりしきりしきり  
金のみやけを務りしきりしきり  
しきりしきりしきりしきりしきり  
小舟れさかもしきりしきりしきり  
むらひのきりしきりしきりしきり  
七日うらましきりしきりしきり  
くひちしきりしきりしきりしきり  
しきりしきりしきりしきりしきり

年とうるさく市ありあつた  
つみ野を云々廣く此をらり野平  
うそのふかおぬ所くありて  
よりねら侍りたり

おみかへー有ともしんておせく  
おれらぬるといふかきん  
とやおとよ川もと云里又侍ひ  
ぬけ所ハありけぬのありぬ  
くすみへへ開ありわらぬと  
めきあへるさやありぬに在柳か

りうきハおくとあまらり家より  
きたひー所いくとくう年  
この後もさうあらんー日れあん  
うさうりへあじんぬるよおひり  
かとねくがろひひをんとあん

昔日國君茲作宇今成荒野  
大難稀盛衰榮枯世間事  
涙眼痕痕更不睇  
さうさうもねとらんもがとかけん  
おとくハ境のみちひある世

こゝと云川舟よめ和をらるいみ  
まをらるあつめは源家原とを  
田代のほうといふあるありてけ  
川とくきてくきくし家原の東  
孔をこくおしとく人のけけ川の  
うきとくまらておきく心いさよめ  
一ふ石田代とてとことてはけり  
ふとがらうまものうきあるまらけ  
張人のけりよいさらて田とくまら  
西将相挑隔廣川東卒流流西

卒傾け客至今停駕惠以彼  
定水自後後

日西海まらけしものよし所遠から  
れしんらよねとんむらよむら  
うち侍りくのをせ川あつる  
箱つて海の梁をとくまらけ  
はとらせまてうつくわをり  
ふましくまらとてしむらよむら侍  
りまらりし十河

空のなる音あり川松木うれ 重門云々曾て  
ありとせしと車よととまりて悲とくうり

子と終る云

昔日國君茲作宇

兩將相挑隔廣川

今成荒野大難稀

東卒涉流西卒顛

盛衰榮枯世間事

行客至今倚駕憲

滿眼淚痕更不晞

冷波寒水自湔浚

子と終る云

出たての香のうへに松の葉の香が  
かかるといふとまじりていふ人も  
あるが

山中 松の香



